河中正彦さんの死を悼む

米　澤　　充

河中さんが亡くなった。本当に突然の訃報だった。世に言う「屠蘇気分の抜けない」新春早々のことで、あまりの衝撃で膝の力が無くなり、信じがたさと痛ましさに電話の前でしゃがみ込んでしまった。自分より若い人の死の報せは、他の場合よりも深く動揺させるものがあるし、哀痛の思いは以来日に幾度か蘇えってくる。それには、言ってみればこれから共に老いてゆくべき身近の人を失った寂しさが入り混じってくるようだ。退職まで残すところ３ヶ月弱という矢先のことであった。仄聞するところでは大型の科研費を獲得して、その初年度でもあり大奮闘のさなかであったとのことであるが、心身への過剰な負荷が一気に噴き出したということであったろうか。惜しまれてならない。

私自身は、ここに追悼文を寄せるには適任ではないことをよく承知している。すでにＯＢの身だということ以外に、精神的な高さと親しさをいう言葉、kongenialのその２つの意味で資格を欠くと思うからである。お互いに若い頃は銘々の思うところで蠢いていた。年長者であるのに私は余裕も無く自分の世界すら碌々作り得ずにいた。それでも若さが気脈を通じさせるようなところはかなりあった。それからの教養部解体時のいろいろな紛糾、そして各学部への'分属'。私の場合は、９年前に山口大学を追ん出て、西の方の大学へ移り、いわば'逃げ場'を作った。おのおのがそれぞれ異なる境涯で頑張るしかなかった。河中さんはこの状況を指して「ディアスポラ」というようなことを言っていたが、それには時が来ればまたいつか寄り集まるという期待も籠められていたのかも知れない。そのようにどこか疎遠さが超えられないでいた責めの大方は私にあったろうが、互いの住まいが仁保川を挟んで１キロの位置にあるので、私はよく与謝蕪村の詩句をうろ覚えのままに「友あり河を隔てて住む」と頭の中に巡らせながら、そこに精進している友のイメージを重ねることがあった。精神的な高さという、いま一つの点では彼は、凡庸でぶらぶら遊びばかり好きな私とは比べがたいほどに、大変才能のある上に休むことなく克己的に精進する人で、集中力と判断力、そして言葉への鋭い感覚の持ち主であったから、それをまともに受け止めることができずに、彼に対する時はどこか畏敬の念に近いものが私の心を強張らせていたかもしれない。勿体ないことをしてしまったものだ。

彼の著述の全く恣意的で散漫な読者に過ぎなかったから、解りえた範囲でし

か言えないが、研究業績表から見て取れるように、河中さんの主たる関心はカフカとリルケの文学にあって、ドイツ文学の中で純粋さの極北とも言うべきこの両文学の本質を突き止めるのに、彼は作品は言うにおよばず書簡や日記などを鋭い言語感覚をたよりに精査し、探り当てたポイントをくっきりと描き出した上で、それらの意味するところを根拠づけるための論理を組み立て、多くは哲学的思想史的連関に置いて照射することに一方ならぬ意義と魅力を認めていたように見受けられる。発見しえた広がりのある連関や理解しえた深度を話して聞かせてくれるときの浮き立つような語り口は忘れがたい。７０・８０年代のフランスの新思想、その奥のニーチェやフロイト、そしてハイデガー、またヘーゲルを通路とする哲学的問題系列などなど。たまに立ち話をするようなことがある度に、それらのとば口でうろうろするだけの私にあれこれの飛び切りの引用を混ぜつつ鮮やかな切り口を披瀝してくれた。同じ熱意と速度で進み得ない自分のことは度外視して、彼を突き動かしているものは、認識への衝迫と両詩人に共通する純粋さだと感じ入るのだった。私を始め周辺に理解者を見出せなかったのか、ある時、一週間ぐらいの研究旅行から戻った折に、存分に語り合える同好の士を持ちえたことの喜びを心底嬉しそうに述べた。私は羨ましくもあったが、安堵もしたことを憶えている。今回の科研費でのプロジェクトはそういったものの延長線上に結実するはずであったものを、と悔やまれる。

私たちの知っている河中さんのもう一つの面は音楽愛好者である。それは例の、良いもの・真なるものを追求しようとする意思の現れの、相当の入れ揚げようであった。理知の方へ急き立てられる心のバランスをとるという意味もあったのだろうか。とりわけモーツァルトの音楽を好んだのはやはり純粋への親近性のゆえであったろう。私などがモーツァルトが今一つ物足りない気がするなど言うと、とても納得できないような怪訝な顔をした。上機嫌な、あるいはそれを装うような時には、廊下などであの痩身を揺する独特の歩き方をしつつよくメロディーを口ずさんだり、口笛で模しているのに出会った。私には自分が好きなせいでバッハの曲が多かったように思われた。そのほかに河中さんと結びつくイメージは'コストパフォーマンス'という行き方だ。例えば衣服を買うという場合にもそれは大いに発揮された。そこから彼の交渉上手ぶりが出てくる。なかなか説得力があった。同じようなエネルギーは授業での種々のアイディアにも現われたし、熱意ある授業ぶりのことはよく聞かされた。そのことと相反するようでどこか通底していたのが彼のユーモアで、成功したウィットや(駄)洒落には自身が随分喜んでいたのが思い出される。知の愉しみ方の好もし

いありようで、河中さんの愛すべき一面ではなかったかと思う。果たしてそのユーモアがうまく自身にも向けられていたのかどうか。今さらに無いものねだり的に言えば、もっと'貪る'ほどの非道徳があっても善かったのではないか。

改めて調べて見ると、先の蕪村の詩句は正しくは過去形で「友ありき河をへだてて住みにき」とあった。哀切な憾みがじんと広がってゆく詩だ。今や隔てているのは現世の川ではなく、幽冥境を異にする意味での川である。その川辺に「すごすごと彳(たたず)める」自らの姿を思い描く。河中さんが亡くなったことをまだなかなか本当とは思えないでいる。友と名乗るには遠く及ばなかったと自覚する私だが、在りえたかもしれないこれからの事を思い描く時、悔しささえ湧いてくる。愛するモーツァルトをもっと聴き、愛する書をもっと読んでほしかった、そして時にそれを語って貰いたかった。ここに衷心より歎悼の意を述べ、ご冥福をお祈りしたい。　(2008年1月30日)